

京中生に インタビュー 2013

第3回

発行日 平成25年 8月 1日(木)
京極町生涯学習センター湧学館

いつもにも増して、レベルの高い受賞作品が揃った去年度の読書感想文コンクール。湧学館もインタビュー時間を長くして話を聞きたいと思います。<編集部>

小林真夕さん(3年)「俺俺」 藤田真未さん(2年)「手紙」

——小林さん、「俺俺」を選んだのは、やはり映画化がきっかけですか？

小林 そうです。映画化が決まったので、その前に原作を読んでおこうと思いました。

——映画は原作の小説とはかなり異なった結末になっていると聞きましたが。

小林 全然ちがいます。映画観る前に原作を読んでおいてよかったと思いました。映画だけを観たのでは、相当混乱するでしょうね。

——小説の方も、インターネットの読書サイトなんかでは「混乱」「怖い」などの感想が飛び交っていますけどね。映画はあれより凄いのかな。私の感想はまたちょっとちがっていて、「俺俺」を読んで、若い時に読んでいたカフカという作家の「変身」とか「城」といった作品を懐かしく思い出しましたよ。

小林 私も、小説の結末の方がいいと感じます。話を、主人公が体験した「俺俺」時代を語り継ぐ…という形でまとめたので話の構成がすっきりしました。「他人とはわかりあえない」と言っていた「俺」が、「わかってし続ければ、たまにはわかる。その程度でいいのだ」と変化していった流れに、少し寂しい感じもしましたが、そういうものなのかな…とも思いました。

——なるほどね。

小林 ふたたび「俺俺」時代が来ないように、他人ときちんと向き合ってわかりあおうとする気持ちが生まれてきました。

——藤田さんの「手紙」は、どういうきっかけだったんでしょう。

藤田 東野圭吾さんの作品なので、読みました。

——去年の感想文コンクール受賞の「メジルシ」も、たしか作者が草野たきさんということで本を選ばれてましたね。

藤田 そうです。あまり本を良く読むタイプではないのですが、気に入った作家だと一気に読んでしまいます。

——こちら、読書サイトでは、「なにか事件があるとどうしても被害者の方に同情が行ってしまう」「加害者の家族のことなんか考えたことはなかった」という書き込みをする人が多いですね。

藤田 「手紙」とは、強盗殺人事件を犯してしまった兄・武島剛志が服役中の刑務所から弟・直貴に宛てて送ってくる手紙なんです。「殺人犯の家族」ということで、いろいろな差別や偏見の苦しみを背負っている直貴に、そんな苦しみのことを何も知らない兄の「手紙」が追い打ちをかけます。直貴の人生がどんどんつらいものになって行きます。

——この物語に救いがあるとしたら、のちに直貴の妻になることになる白石由美子の登場でしょうか。小説の中で、直貴の人生に深く係わってくる二人の女性、由美子と田園調布のお嬢様・中条朝美はたいへん興味深い登場人物でした。

藤田 私は、この本を通して、差別や偏見ということをとて深く考えさせられました。本の中で、東野さんは、直貴に「人間がいる限り、差別や偏見はなくなる」と語らせています。私もそう思います。でも、差別や偏見がゼロに近づけられるように努力することはできないと思いましたし、していかなければならないとも思いました。



京極読書新聞は
毎月1日発行です。



左：藤田真未さん（2年）
「手紙」
東野圭吾／著
（毎日新聞社，2003. 3）

右：小林真夕さん（3年）
「俺俺」
星野智幸／著
（新潮社，2010. 6）



左：米山若那さん（3年）
「100回泣くこと」
中村航／著
（小学館，2005.11）

右：渡辺夢那さん（2年）
「そうか、もう君はいないのか」
城山三郎／著
（新潮社，2008.1）

米山若那さん(3年)「100回泣くこと」 渡辺夢那さん(2年)「そうか、もう君はいないのか」

——今日は「アリエッティ」以来4年ぶりの宮崎アニメ「風立ちぬ」のポスターを持ってきました。お二人の読んだ本にも大きく関係しています。

米山 「100回泣くこと」がですか？

——そうです。特に「100回泣くこと」は。若くして病におかされた恋人の最後の日々を看とって行く…という物語構造は、この堀辰雄「風立ちぬ」をもって開祖とするのです。以後、ケータイ小説からこの「100回泣くこと」まで、映画～テレビ～舞台と、ありとあらゆるメディアで何万回と受け継がれてきた基本パターンです。

渡辺 「そうか、もう君はいないのか」も「風立ちぬ」パターンなんですか？

——「風立ちぬ」最終章のあたりを思わせませう。もちろん城山三郎ですから、パクリなんてことはあるわけもなく、城山三郎ならではの言葉、文体、世界観で一貫した独自の世界をつくっていますけれどね。同じことは宮崎駿にもいえて、単純に堀辰雄「風立ちぬ」をアニメ化するわけもなく、作品は、「風立ちぬ」物語に加えて、戦争中の戦闘機・ゼロ戦の開発者・堀越二郎の人生とドッキングする…という、今の段階では思いもつかないアニメになるらしいです。夏が楽しみです。でも、渡辺さん。城山三郎とは、ずいぶんシブい本、選んだんですね。

渡辺 本屋さんに行って、いちばん最初に目についた本で感想文を書こうと決めていました。その本が、この本だったのです。城山三郎の、まさか自分より先に妻に先立たれるとは…という想いに、私も、私が子どもの時に早くして亡くなった祖父や祖母の思い出がよみがえってきて、とても共感するところの多い本でした。

——そうなんです。お二人とも、期せずして、お祖父さん・お祖母さんの思い出を感想文中に織り込んでいるんですね。

米山 私も「100回泣くこと」の藤井君に、妻のがんを告知された時の祖父の悲しみ・苦しみを思いました。好きな人

と、大切な人と「一生共に生きていく」ということは、いつか失う悲しみ、失わせる悲しみを互いに覚悟して「共に生きる」ということではないかと深く思いました。

——そして、お二人とも「今、生きている自分」という意味についてもきちんと語っているの、感想文を読んでいて大変清々しい気持ちになるんです。

渡辺 この物語は、私に二つのことを教えてくれました。自分の好きな方を選んだ方が楽しい人生を送れること。そして、大切な人には気持ちをちゃんと伝えておくこと。どちらも、素敵なメッセージでした。

米山 私は今、生きています。そしてとても幸せです。それをあたりまえと思わずに自分の命を大切にしていきたいです。

——最近、読んで面白かった本とか、ありますか？

渡辺 「王様ゲーム」ですね。

米山 「県庁おもてなし課」にハマりました。あと、「きいろいゾウ」もよかった。



湧学館所蔵の堀辰雄「風立ちぬ」(野田書房、昭和13年刊)の復刻版。貸出もできますので、ぜひこの機会にお読みください。本を読んでから映画を観ると、宮崎駿の「風立ちぬ」解釈の雄大さに驚かされます。2013年夏、いい思い出ができました。

「袖珍文庫」に続いて 戦前・戦中の紙芝居が出現！

先月、明治時代の「袖珍文庫」の出土に驚いたばかりですが、さらに、あの物置からとてつもないものが出現しました。片隅にあった風呂敷包みから、なんと、戦前・戦中期の「紙芝居」が出てきたのです。数にして、十数編。直射日光のあたらない物置で眠っていたため色褪せもなく、枚数も揃ったものが多い。現在、湧学館で整理中です。

紙芝居は基本的には子ども相手の消耗品でした。高度成長期の昭和40年代、テレビの普及によって街頭紙芝居は姿を消して行きますが、無くなってはじめて、人々はその大切さに気がついたのです。で、気づいた時はもう遅い。今では戦後の「紙芝居」でさえほとんど残っていないのが現状です。

それを考えると、今回、戦前・戦中期の紙芝居がこれだけまとまって発見された意味は大きい。紙芝居はそれぞれの時代を映す鏡です。おとなたちが子どもたちに何を「教えよう」としていたかをくっきりと映し出しています。例えば、この「宮沢賢治原作」「文部省選定」とされる紙芝居「貝の火」。



発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

ウサギの子・ホモイは川で溺れかかっていたひばりの子どもを命がけで助けた。その褒美に、ホモイは鳥の王から宝物「貝の火」を託される。だが、自らの慢心と、キツネの甘言に騙されて、ついに「貝の火」は消え、ホモイの目は見えなくなってしまう…というのが本物の宮沢賢治「貝の火」なのですが。

紙芝居は結末が180度ちがいます。なんと、ホモイは騙されていたことに気づき、敢然とキツネと闘い勝ってしまうのです！ なぜ、このようなひどい改ざんが行われたのだろう。戦時中、宮沢賢治は「理想的日本人」として時の政府宣伝に使われた一時期があります。この、時局に都合のよい結末書き替えなどは、そういう権力の情報操作を示す典型的な事例なのかもしれません。7月の京極小学校（4年生）出前図書館でも、本物と紙芝居を読み比べ、「戦争」というものを考えてみました。

この「戦前・戦中期の紙芝居」報告は来月以降も続きます。

<湧学館／新谷保人>

